

21 世紀の世界システム論を考える

報告者：丸川哲史（明治大学・非会員）

中山智香子（東京外国語大学）

討論者：植村邦彦（関西大学）

世話人：中山智香子

本セッションは丸川哲史氏（明治大学、非会員）をお迎えし、丸川氏と世話人の中山智香子が報告を行い、植村邦彦会員にコメンテーターをお願いして開催した。世話人中山は二〇一二年の本学会第三十七回大会において「グローバルヒストリーと思想史の位置：G. アリギ『北京のアダム・スミス』を手がかりに」（セッション K）を組織し、秋田茂氏（大阪大学、非会員）と土佐弘之氏（神戸大学・非会員）を招聘して討論者として議論を行った。本セッションはその続きの議論を行うことを意図して企画されたものである。

世界システム論の代表的論者のひとりであったジョヴァンニ・アリギが遺著『北京のアダム・スミス』において提起したテーマである「世界システム論における中国の位置」は、前回のセッションにおいてもひとつの焦点であったが、その際には中国に内在した視点からの考察が欠落していた。しかもこの数年間で、中国を世界との関係から構造的に把握・理解することの重要性はさらに増大したといえる。そこで今回は、中国や東アジア全般に造詣の深い丸川氏に、氏が最近邦訳を手掛けた汪暉『世界史の中の世界』（青土社、2016年）などを踏まえて報告をいただくこととした。一方、植村氏は『ローザの子供たち、あるいは資本主義の不可能性：世界システムの思想史』（平凡社、2016年）を刊行したばかりであり、特に世界システムの思想史・系譜学という視点から二報告に論評をいただき、議論していただくよう依頼した。

中山報告はまず、「中国から世界システム論を考える」ことが、これまで西洋でオランダ、イギリス、アメリカと引き継がれてきたヘゲモニーをアジアの一国が引き継ぐのか、あるいはシステム自体が断絶し、ひょっとすると終焉するのかといった問いにとどまらないという問題を提起した。その起点として、韓国で批判的中国学の研究を行う李南周らの見方を援用し、中国が「資本主義受容とその乗り越え」という二重課題の緊張感を持続的に抱えてきたという論点を確認した。これは日本を含め多くの後発国が共通して直面してきた近代の超克という問題の一端でもある。一九八〇年代以降の新自由主義の潮流は、これを受容した後発諸国内部に社会的分断をもたらしたが、中国においても鄧小平が一九七八年以降に改革政策を行った時期がちょうど新自由主義期にあたる。本報告では、政策決定のペースや細部に新自由主義と異なる部分があったとしても、結果としては中国もまた同様の社会問題に直面したこと、また一九八九年の天安門事件が新自由主義を加速させ、世界システムにおける中国のプレゼンスを加速させたことを指摘した。なおアリギや汪暉は、それぞれ中国の平和的台頭、齊物平等といった概念によって、中国「ヘゲモニー」時代に

における対資本主義的オルタナティブの方向性を提示し、変化がもたらされる可能性に期待を示したが、中国の今日的現実はいむしろ従来型のヘゲモニーを踏襲する方向性を示していることを、最後に手短に確認した。

一方、丸川報告は、「「一带一路構想」（二つのシルクロード構想）と中国の内外問題」と題して中国の西域構想に照準し、地図やデータも示しながら、ごく最近の中国資本主義的現実の重要な側面を明快に考察した。丸川氏によれば、この構想の国際的背景は二〇〇一年のいわゆる九・一一以降のテロ対策に遡ることができるが、直接的には二〇〇八年のリーマンショックの時期のロシアの方向転換と深く関わっている。ロシアはグルジアとの紛争をきっかけに西側との友好関係を断ち、中国との提携関係の基調を築いて、西側の国際秩序の軸をも変化させた。折しも中国はリーマンショックの影響を回避するため、沿岸部の資本を内陸部へ移転させ、貧困問題にあえぐ新疆自治区の状況改善をも同時に試みたのであった。一带一路構想はまた、二〇一六年十月の時点でも大きな問題である南シナ海問題とも関わっている。それは南シナ海の海路という生命線を止められるリスクを緩和するために、パキスタン（南アジア）を媒介に内陸（中央アジア）と海洋（インド洋）をつなぐ径路を確保しようとした構想である。このように中国は欧米が力を入れているところでの南＝南交流を進めているといえるが、たとえば一带一路構想はインドの戦略と交わる部分もあり、インドを後押しする米国と潜在的にぶつかっている。また中国の内陸的発展の延長上にあるとされるアフリカ諸国においても、資源採掘権を得てインフラ整備を行うという事業は両義的である。

さらに丸川氏は、一带一路構想が汪暉『世界史の中の世界』第一章に詳しいこと、実はそれがカシュガル大学での講演録であり、このこと自体中国の知識人の関心のあり方を象徴することを指摘した。また中国国内での語学を含む教育の方向性も近年再編され、日本よりも南アジア・中東などへの関心が高まりつつあるとのことである。

植村コメントは、二報告に対し明瞭な論点を提示しつつ質問を行った。中山報告に対しては第一にアリギの「世界ヘゲモニー論」に関する問題提起を行った。アリギは他の世界システム論者と異なり、ヘゲモニーに内在する力の資本主義的論理と領土主義的論理の矛盾に意識的であり、かつてイタリアの都市国家が矛盾の解消に成功しなかったことを強調した。ちょうど中国のヘゲモニー内における華僑の実質的な経済的権力と中国共産党の政治的権力の関係が、この矛盾を体現するかに見え、中国の今後の展望は必ずしも明るいとまでは思われない。植村氏はアリギの三つのシナリオを踏まえ、最悪のケースでは世界システム全体が混乱に陥る可能性も否定できないと指摘した。この点から第二に、世界ヘゲモニーの行方とともに資本主義世界システムの持続性に関して、むしろ中国共産党がアメリカ的な新自由主義の方向性へと変質している現実が指摘された。またそこから中山報告が示したようなオルタナティブの方向へ向かうきっかけへの疑問が示された。

丸川報告に対しては、中国をどのような「体制」と見るができるのかについて、汪暉の分析や近年の日本研究者による中国研究なども視野に入れて質問が行われた。提示さ

れた選択肢は、新自由主義の一つの形である混合型自由主義か、従来から指摘されてきたような国家資本主義か、あるいは理念としては労働者国家を標榜しつつも失敗しつつある状態かの三つであった。とりわけ労働者国家の理念に関して、この理念はトロツキーを引き継ぐものだが今や農民工がワーキングプアへと転落している現状があり、ウォーラーステインも指摘したエスニシティの階級化が進行していることも指摘された。

コメントに対して両報告者からリプライを行ったが、中山はアリギによるオルタナティブとしての中国のあり方が必ずしも現状で支配的でないとしても、そこに今後の可能性を見出したいとした。丸川氏からは「共産党とは何か？」という問いにこたえることのむずかしさが表明され、外在的には権力闘争と見えるものの内部に進行する諸力や混沌そのものに目を向けることの必要性、そして中国理解にとっての人文知の重要性が指摘された。ちなみにこの点はセッションの最後にあらためて言及され、セッション全体に鮮烈な印象を残すものとなった。

残り時間は三〇分程度であったが、フロアとの質疑応答も活発に行われた。たとえば東アジア共同体構想をめぐる特に中国側の関心についての質問が出されたが、「東アジア」というフレームにおいては日本と韓国が当事国であるため日韓関係という別問題が含まれること、この論点に関して中国は必ずしも積極的でないことが回答された。また中国は中央アジア、東南アジアと接する部分を持っており、東アジアという枠組には収まりきらないことが強調された。次に、世界システム論に関しては歴史分析、特に歴史上のネットワークの分析が重要であること、その場合のネットワークは必ずしも一つである必要はなく複数でもあり得ること、実際に現状ではいくつかのネットワークのうち一つが機能しつつある状態であるというコメントが示された。さらには、昨今中国からも招聘されることもあり中国の研究者たちと直接交流のあるマルクス主義者の立場から、本セッションで単にアメリカの新自由主義の方向に突き進むだけでなく、人文知を重視する中国のあり方が示された点に将来的への展望を見出すことができるという、共感の声が寄せられた。これによってセッション全体を明るい締めくくりで終了することができた。

大会全体の最後の時間帯に行われたセッションであったため、セッション終了後にも、時間切れで質問やコメントを出せなかった参加者と登壇者のあいだでしばらく議論や意見交換が行われ、活発な議論の余韻を楽しむ雰囲気があった。報告者、コメンテーターの準備した資料では部数が足りず、一部の参加者に不便をかけることになったが（資料を希望される参加者には後日メールで連絡をいただき、電子ファイルで数名に送付した）、遅くの時間帯まで残って熱心に聞いてくださった参加者諸氏に感謝したい。なお参加人数はセッションの間に若干推移したが、およそ三十五名程度であった。